2012 年度 修了

クリシュナムルティの教育論
― 気づきの中にある学び ―

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
人間形成・臨床教育クラスター
上野　ふみ

本論文では今までの学校教育で表立ってはほとんど行なわれていない、心について・人生そのものについて教育の中でとりあつかうということの必要性と可能性を検討した。そして、生徒と教師がお互いに向き合っていけるような、そして生徒も教師も自らの人生に向き合っていけるような教育の在り方、教師・生徒の在り方について検討した。

それを考えるにあたって、クリシュナムルティの思想を考察した。クリシュナムルティはインドの思想家で、世界各地で講話を開き、徹底的な懐疑精神のもと、自分自身で見出すことの重要性を主張しつづけた。また、若者への教育にも熱心で、インド、イギリス、アメリカに学校も設立した。

第１章では、クリシュナムルティの考える教育を考察するにあたって、彼の言う「自由」について詳しく説明する必要があるため、それについて検討した。自由とは、彼が考えている教育の在り方、というよりも、彼の考えている生き方の根底にあるものであり、それは最終目的地ではなく、まずそこから始めるという出発点のようなものである。ふだん私たちが使っているような「自由」が、いかに限定的なものであるか。クリシュナムルティは、私たちがいかに簡単にあらゆるものを信用し、それによって条件づけられているのかを詳細に語っており、条件づけに気づくことがまず大切であると述べている。

第２章では、自由であるために、クリシュナムルティが常に言い続けてきた重要な生きる術である「瞑想」について検討した。クリシュナムルティのいう「瞑想」とは、いわゆる方法に則って行なうものでは決してなく、日常生活において、すべてのものに気づいているということであった。何か時間をとったり、場所を構えて行なうようなものではなく、生きているというそのプロセスに、ただ気づいているということである。そして、そこから自由が始まるのである。

第３章では、第１章、第２章をふまえ、クリシュナムルティの考える学びとは、教育の姿とはどのようなものであるかを、場としての学校、学びあう子供と教師についてに分けて考察した。子ども達のことを限定的な存在と見なすのではなく、あらゆる可能性に開かれた存在であると真に理解することが出来れば、自然と子ども達に対する態度は変わっていくことだろう。教師自身が、まず自分の中の自己矛盾や条件づけに向き合い、深く観察することから始めれば、子ども達が生きていくことの手助けとなる教育に近づくことが出来るのではないか。この論文は、その必要性、可能性を示唆したものである。